

## 6.1 – フロイデンベルク城



**Address:**

Schloss Freudenberg

65201 Wiesbaden-Dotzheim - Germany

**Task:**

「五感と思考を活性化する体験フィールド」

**Architect:**

--

**Year of construction:**

1905

1905年に建設されたフロイデンベルク城は、元々個人宅だったが、ホテル、ナチスの未婚の母収容所、米兵のレクリエーションセンター(エルビス・プレスリーがセンター内のジャズクラブで一度演奏したという逸話がある)、国際ペンテコステ教会の本部など様々な用途に使用されてきた。自然芸術協会が入居するまで、10年ほど無人だったため、大規模な修復工事が必要となった。この修復工事は「芸術と文化による癒し」と呼ばれ、現在も継続中であり、この地域内の個人、民間・公共団体が参加した共同作業となっており、フロイデンベルク城再建計画といったような様相を呈している。

「五感による創造の常設展」は、1900年にエッセンで生まれた建築家 Hugo Kükelhaus が最初に考案したもので、工業化によって今までの生活がガラリと変わってしまったような時代においても、自然を人間にとって身近なものにすることにその人生の大半を費やした。大工としてキャリアをスタートさせた Kükelhaus は、熱狂的な伝統主義者で、標準的な度量衡を一切拒絶し、ヒューマンスケールを文字通り具現化することに心血を注いだ。しかし、最大の関心事は教育で、とりわけ自然は身近なものであることを次世代の若者に伝えることに熱心だった。診療所、学校、住宅などのための「五感に優しい遊び場 (organgerechte Bauweise)」を制作した数年後、ドイツ政府の要請で1967年のモントリオール万博のドイツパビリオンに作品を展示することになった。「体験ステーション」は来場者の好評を博し、万博終了後、ドイツに持ち帰られたものはほとんどなかった。67歳のとき Kükelhaus は、ラジオインタビュー、ワークショップの運営、コンサルティング、執筆などの活動を精力的に始めた。その後の8年間で自身の作品コレクションを制作、あるいは再制作し、それらはババリアン州の依頼で1975年にミュンヘンで開催された国際手工芸品展示会に出展された。

同年、サーカス団の一行のドイツ巡業に参加し、体験ステーションを展示した。Kükelhaus は1984年に永眠したが、その教え子である Beatrice と Matthias Schenk の2名が巡業を引き継いだ。彼らはオーストリアやスイスにも足を運び、1992年、体験ステーションはヴィースバーデンに帰還した。翌年、自然芸術協会 (Natur und Kunst Gemeinnütziger e.V.) が設立され、体験フィールドはフロイデンベルク城に常設されることとなった。

フロイデンベルク城(五感と思考を活性化する体験フィールド)の来場者は、五感を活性化するために慎重に設計された「不完全な展示品」ばかりでなく、80種類以上の相互に関連する体験ステーションを楽しむ。そこでは「視覚、聴覚、嗅覚、触覚がどのように働くのか、どのように指で触り、足で立ち、手で持ち、頭で考え、肺で呼吸し、脈動・振動しているのか」を体感できる。

壁の上で回転する巨大な白黒と色彩豊かな円盤がダイナミックな像を創り出し、完全な暗闇の中を迷路が昇降する。天井に吊るされたスチール製の鐘の舌は、床に届きそうなほど長い。砂場から突き出た細い棒の上の鉄板にはチェロ弓が付いており、音楽と音画を創造する。16haの庭にあるエオリアンハーブ(名前はギリシャ神話の風の神に由来。風により弦を鳴らす)の音色は、石の迷路の向こう側の丘の中腹にまで届く。表面の滑らかな小石や少し大きめの石、煉瓦、木材などの素材を敷き詰めた裸足で歩く小路は、左右にうねりながら森を抜けて、ハミングする穴を通り続いていく。遊び場の横には、丁寧に組み上げられた丸太が何本もあり、丸太から丸太へとロープが張られている。他にも竹馬、バランスディスク、2つ一組の巨大なブランコなどがある。



ダークバー

ダークバー (Der Dunkelbar) では、最高に風変わりな食事を体験できるだろう。客は、天井から床までの丈がある真黒な重いカーテンをくぐって、完全な暗闇へと入っていく。最初は恐る恐る入っていくのだが、愛想のよいバーテンダーが、「私の声のする方について来てください」と声をかけて不安を和らげてくれる。そして、「右です」、「左です」という指示に従いながら店内へと進み、手探りで椅子を探す。注文を取り、出来上がると、カウンターの上に優しくコツコツと音を立ててグラスや皿を並べ、客が迷わず手を出せるようにしてくれる。緊張感から何度ものなんとか店内の様子を見ようと努力するが、最終的にはリラックスして料理や飲み物を味わえる。ただ、どうしても耳をそばだててカチャカチャというフォークの音やクスクスという笑い声、足音、咳払いなど様々な音を聞き分けようとしてしまう。これらの音は、通常の状態であれば白色雑音として知覚される。フロイデンベルク城での成功に刺激を受けて、最近ではベルリン、ケルン、ハンブルク、ニュルンベルク、チューリッヒなどでもダークバーがオープンした。